

私は2020年度のロームシアター京都の「レパートリーの創造」という企画で演劇作品をつくることを依頼されています。

この企画は私が戯曲を書き、それを演出し、来年の1月に上演する予定です。「シーサイドタウン」という題名で長崎の海辺の町を舞台にしています。今は、これからの創作プロセスを企画運営の担当者と議論し、リハーサルに向けて戯曲の執筆を始める段階にあります。

この企画をこれから続行するにあたって、表題の事案について、以下、私の思うところを述べたいと思います。

先日、来年度（2020年度）より三浦基氏がロームシアター京都の館長に就任するという人事が発表されました。三浦氏は現在、自身が代表をつとめる演劇集団「劇団地点」内の創作の過程においてパワーハラスメント行為があったのではないかという疑いを持たれている人物です。私はこのハラスメントに関する事案を昨年、映演労連フリーユニオン（以下ユニオン）が発表した記事で知りました。

ロームシアター京都は先の館長就任の声明に追記するかたちで、この件（ここでは退職問題という表記）については劇団からの説明がある旨を発表しました。その後、劇団地点より「団体交渉 経過のご報告」という表題でパワハラ行為は一切なかったという主旨の説明が劇団のホームページ上に発表されました。それに対して、ユニオン側からも見解が発表され、パワハラが一切なかったというのは劇団側の解釈にすぎず、ハラスメントも一方的な解雇もあったこととして、この件に関して団体交渉を継続するという主張をしています。

以上の経緯からもわかるように、劇団地点とユニオンの間には係争中の事案があり、しかもそれが解決しておらず、それゆえ三浦氏にパワハラ嫌疑がいまなお存在しているというのは事実のようです。

このことから、私は、三浦氏がロームシアター京都の館長に就任することに反対します。この館長就任は本来であれば当該の事案が何らかの解決を見たという判断がなされた後に決定されるべきであり、現状においてはあまりに拙速と言わざるをえません。

先のロームシアター京都が発表した館長就任の追記にもあるように、芸術文化の分野において人権の尊重と共生社会の実現を目指すという観点から、ハラスメント行為や退職強要の疑念のある人物が市民生活と密接な関わりを持つべき公共劇場を運営し、その統括責任を負うことはできないと思われまます。また、ロームシアター京都は多くの運営スタッフや劇場職員を抱え、それぞれの企画の創作過程において俳優・ダンサー・アーティストなどとの共同作業が行われることにもなります。このままでは、これらの企画・運営・創作の現場で、三浦氏によって懸案の行為が再度なされるかもしれないという不安は払拭できないでしょう。さらに、このロームシアター京都における館長就任の人事自体がハラスメント行為を容認していることにもなります。

また、私が何よりも違和感を持ったのは、劇団地点から発表された先述の声明「団体交渉 経過のご報告」において、パワハラ行為は一切なかったという主張を展開していることでした。この主張の主な根拠の一つは、三浦氏及び集団の構成員が演出行為と権力を分けることができるかと判断していることにあります。しかも、驚いたことに、それが当該事案の告発を受けた側の意識においてその判断が明確になされているという点（つまり創作現場に暴力が一切紛れ込むことはなかったという明確な判断がその現場を管理していた主体からなされている点）でした。この権力に対する認識は無邪気としか言いようがありません。

言うまでもなく、権力は私たちの社会や身体に遍在しており、それは複雑で流動する人間関係において潜在し、いつどのような形態で私たちの前に顕在化するものなのかわからないのです。このことは、演劇の創作現場においても同様のことが言えます。私たちが演劇作品を劇場で上演するとき、その上演が取り扱う表現内容がこのような権力や暴力と無縁であることはないはずです。権力に対してこのような無垢な態度をとることからしても、三浦氏がロームシアター京都において演劇の創作を主導し劇場事業の企画立案・実施の責任を負うことに甚だ心もとなさを感じます。

最後に、このことはこれからのロームシアターという「演劇の現場」の創作活動に関わることでもあり、私個人の見解であるにせよ、どうしても述べておこうと思います。この事案は演出家と俳優の関係がどのようなものなのかという問題を含んでいます。もちろんそれは、さまざまな演劇の創作現場における芸術的価値観であり、それがどうあるべきかという意見をここで述べることは差し控えたいと思います。ただ、俳優は演劇の最前線において未知なる出来事のさなかにあつて、理解不能な美的サインをつくり出していることは確かなのです。演出家もその俳優に直面してやっと創作者として存在できるのです。この事案を契機に、一旦はそれぞれの芸術的価値観とは関わりのないところで、「演劇における俳優のありかた」が問題提起されるべきではないでしょうか。

今回のユニオンからのパワハラ事案の報告は、たとえ自らの意識では身に覚えがないという判断であっても、俳優からの重大な問いかけとしてこれに向き合い、都合の良い「結論」に添うようなものにすることで、そのかけがえのない「問い」のほうをなかったものにしてはならないのです。それは加害・被害の当事者の問題をも越えて、劇場に関わる私たちが抱える問いとして思考すべきことなのではないでしょうか。

私はこの人事について言いようのない恥ずかしさを覚えています。なぜなら、このことに滑稽な理不尽さを感じるからです。この理不尽さのうちには、権力や暴力の問題を著しく低く見つめる鈍感な態度や問題さえ立てることなく性急にそれを解決済みにするお調子者の見識が含まれています。いや、それだけではなく、この決定に対して妥協せざるをえないのではないかという私自身の無力さにも苛まれるからです。このようにして私たちの周囲は取り返しのつかない出来事で溢れてゆきます。しかし、それでもまだ、私は常に最善のことをおこなう余地があると信じています。

最善とはなんでしょうか。私は今回の依頼された企画において演劇作品をつくり出し、それをたくさんの人々（既に忘却の彼方にある過去の人々とまだ見ぬ未来の人々も含め）に鑑賞してもらいたいと思っています。この作品では現代を生きる人間の手では容易に解決できないような暴力の問題がモチーフとして描かれることでしょう。それをこの世界に向けて表現することこそが最善の策とも言えます。

しかし以上の見解で示した理由により、この館長就任の問題が何らかの解決の目処が立たない限り、残念ながら、この企画の依頼を受託するのを保留もしくは延期、場合によっては断念することも選択肢の一つにしなければならないのです。